

民族誌学的研究手法を用いた厚岸ニシンの生態環境変化の考察
インディアナ大学大学院人類学科 濱田信吾

本研究は、厚岸における人とニシンの歴史的関係を中心に、地元民が持つニシンに関する環境知識という無形文化的資源について考察するものである。厚岸におけるニシンの来遊は1970年に途絶し、その後の漁獲量は多くても数十トンという状況であった。地元漁師や長年厚岸に住む方々が持つニシンに関する知識は、ニシン資源が豊富だった頃の海の状況やそれと現在の厚岸湖湾との異なる点について貴重な情報を我々に提供するものであり、今後の厚岸における湾岸漁業において重要なものである。本研究は、1970年以前のニシンと現在の厚岸ニシンの現状と比較考察しながら、本研究は厚岸漁師と住民の“ローカルな”知見から厚岸湖湾の沿岸海洋生態系の変化を明らかにし、「ニシン生態環境」のさらなる理解を目標とした。

文献資料からは、ニシン漁が発展する一方で、漁獲量が激しく変動しながらも減少した傾向が改めて確認できた。ニシンが厚岸湖湾に多く来遊していた頃の沿岸海洋生態環境や前浜の様子などについても情報を収集することができた。そして、厚岸のニシンに関して、聞き取り調査で特に挙げたのは、港湾開発と流氷の生態系機能、そして漁獲圧力であった。昭和中期のニシン漁については、今でも多くの方が鮮明に覚えられていた。それゆえ、今後聞き取り調査や体系的な質的研究を継続することでさらなる環境知識の蓄積が期待される。その一方で、歴史的に見ると現在のニシン資源量はとても少なく、この少ない資源量のニシンの来遊が、今後「当たり前」と認識されるようなことは、沿岸海洋生態系の回復や保全への取り組みの発展のためにも避けられなければならない。そのためには、元・年配漁業者や長年厚岸町に住まれている方々が持つ海に関する環境知識を次の世代と共有していく必要がある。

本研究を振り返ると、聞き取り調査の回数や参加者のサンプリングの偏りがあり、当初目的としていたほどの成果をあげることができなかった。年配漁業者を中心とした情報収集は一定の成果があったが、高齢者、特に80代を超える方からの聞き取り調査はあまりできなかった。今後さらに地元住民、特に高齢者と女性の方からの聞き取り調査などを通じて更に資料収集を進めていきたい。

今後のニシン資源量の回復には、放流事業に依存するのではなく、ニシンの産卵場となる藻場回復、ニシン稚仔魚の生息域の確認と保護や、若齢魚への過度の漁獲圧力を防ぐなどの漁業管理が必要である。沿岸生態環境の変化とニシン漁獲量の因果関係の理解はさらに継続的で総合的な研究議論を必要とする。厚岸湖内に通年で生息するわけではないニシンの生態環境を理解そして回復や維持するために、地元住民が語ってくれた海藻群茂地やニシン豊漁期に多く見られた小生物や植物に関する歴史生態学的情報は、今後のさらなる生態学的研究そして資源管理計画に有効利用できるものを期待している。